

# 10～13世紀泗州大聖信仰研究

### 研究対象：泗州大聖に対する信仰の展開

### 従来研究の課題：唐代以降、信仰展開の状況は不明

### 学問的必要性・妥当性



中国の唐代(618～907年)西域渡来の僧伽(628～710年)という外国人僧侶江南、特に泗州(今江蘇省盱眙県)で活動、神異を現し、長安の大薦福寺で坐亡、泗州の普光王寺に埋葬された。歴代の皇帝より封号を与えられ、没後しばしば出現し、戦乱から泗州城と人々を守った。後世、他の民間信仰や他宗教と融合し、水神および功能多様な神となった。

唐代史、敦煌学、考古学、美術史研究で分かったこと：生前の事跡や一人の高僧に対する信仰

➢神への転換に関する歴史的経緯は不明

**研究目的：**10～13世紀(ほぼ宋代960年～1279年にあたる)に、①人々が泗州大聖を信仰した動機を改めて検討、②信仰と地域社会との関係を整理、③泗州大聖信仰の変遷と伝播の歴史的経過を明らかにする。

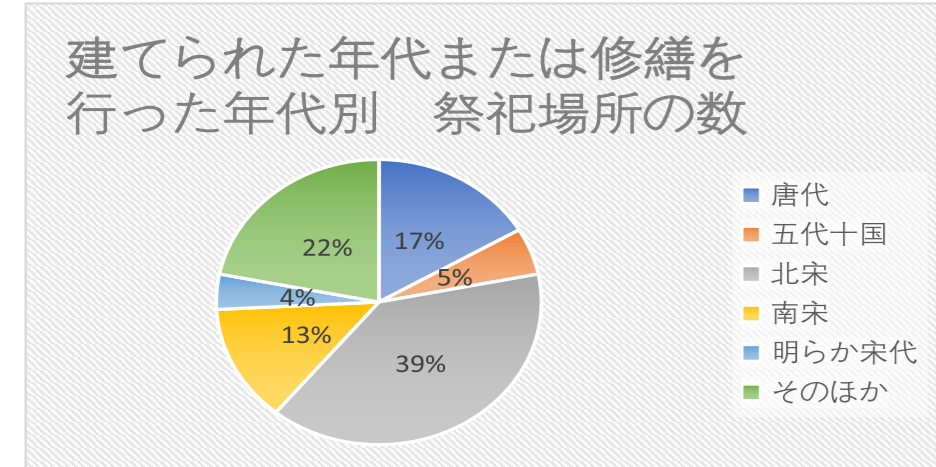
儒教・道教・民間信仰など中国伝統思想のなかで、外来思想である仏教の中国における展開の特徴を解明することは、学术界で最も関心の集まる点。哲学・仏教学・歴史学の研究の交差する点に位置する泗州大聖信仰をめぐる研究は学際的研究という観点からも意義がある。

## 他分野との融合：研究方法

- 寺院に関する「記文」、地方志、筆記史料等文献資料に対する文献解読と史料批判
- 宗教学、人類学、民俗学が重視するフィールドワーク、地理学の空間・集団分析など 複合手段の活用、碑文資料の解読、立地分析、寺院データの数量分析、傾向分析など

## 現段階の作業と結論

### 1. 全国に及んだ泗州大聖信仰分布のビッグデータ(154箇所)収集と一部の現地調査



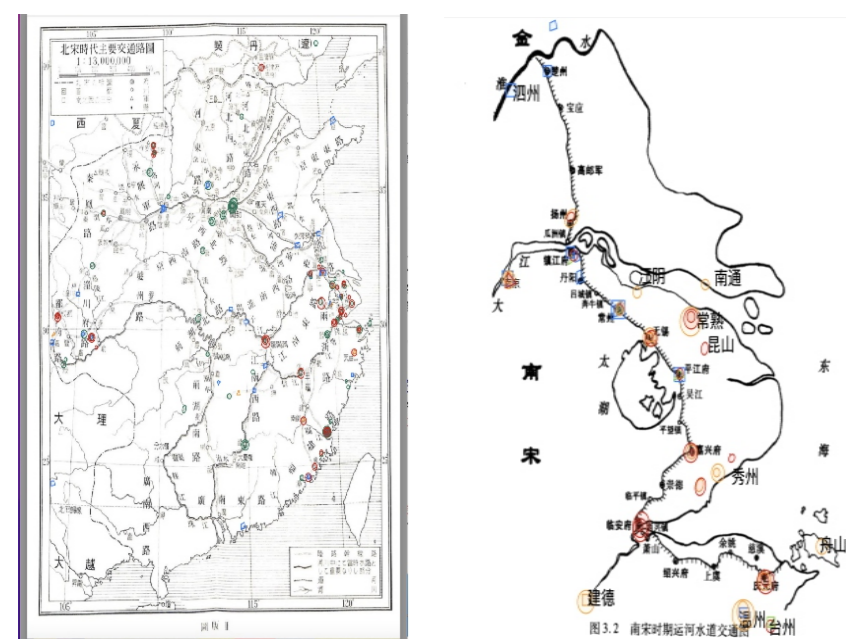
2/3は長江下流域、江南、東南沿海地域に集中  
勅賜の多かった年代：北宋朝の大中祥符年間(1008年～1016年)、治平年間(1064年～1067年)

北宋中期 ➡ 最も発展 ➡ 国家に認定された  
南宋 ➡ 移額(廃棄した寺院の額を借りる)現象

### 2. 前記ビッグデータによる空間分布図の作成

北宋：首都開封を流れる運河、淮南運河沿線  
南宋：東・南へ広がっていく

- ・首都臨安周辺、
- ・江浙地域内＝浙東運河沿線に集まる傾向
- ・舟山・明州・台州、南劍州以外の福建＝海路が便利なところ



\* 信仰の広がり政治中心地、陸路、水路など交通路の整備と深く関わる

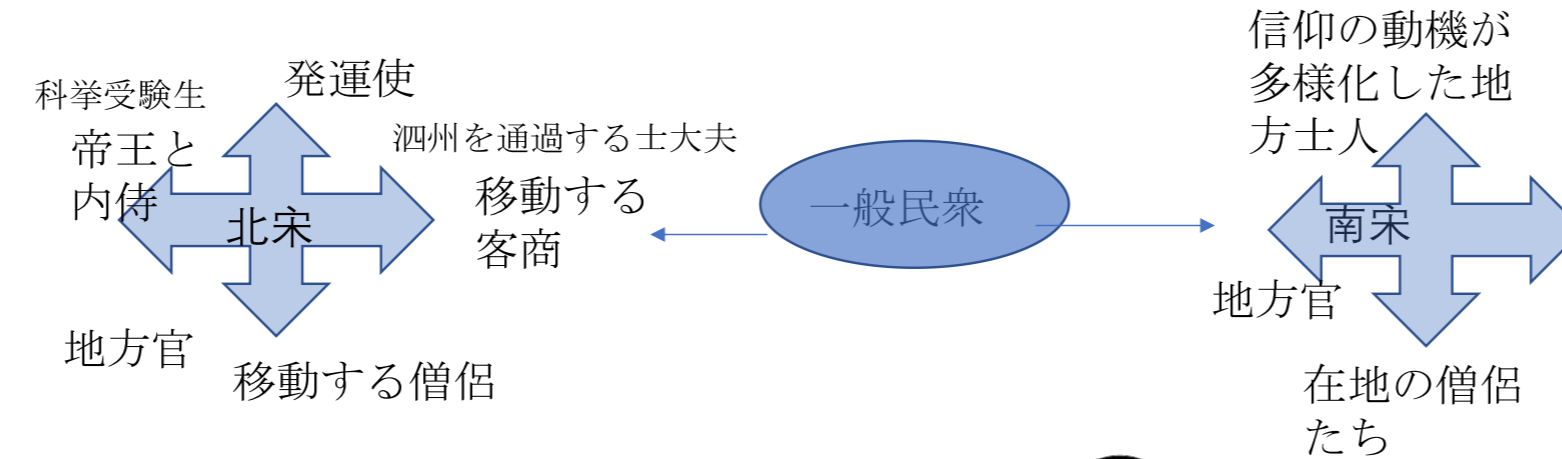
### 3. 当時の人口移動の路線図と照合して信仰の伝播パターン想定



信仰の及ぶ地域＝宋金戦争による移民の集住区  
信仰の広がり移民の移動ルートが重なる!

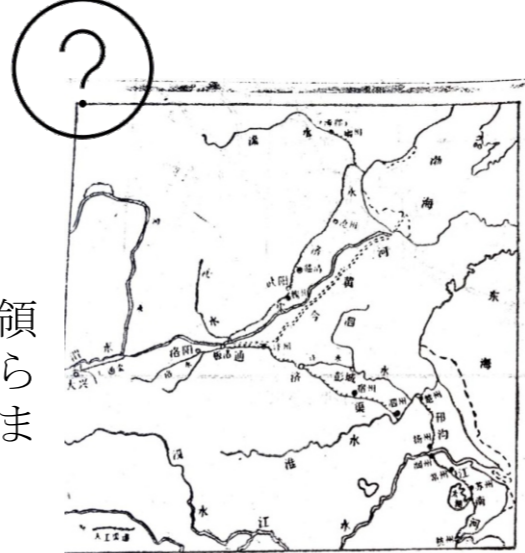
- 泗州の信仰者が他地域に
- 外来民衆が泗州に来て、信仰者となり、地元に戻って祠廟を立てる
- 外来の民衆が泗州に来て、信仰者となり、地元以外で祠廟を立てる
- 外来の信仰者が泗州普照王寺を巡礼して、地元祠廟を建てる

### 4. 史料解読から分かる信仰の担い手



北宋と南宋において大きな変化を起こした理由は?

北宋と南宋における国際環境と制度の違い  
南宋時代においては、泗州は宋金戦争を経て金の領土となった。交通の要衝である泗州の通行が妨げられ、泗州大聖の漆身も金の中都(北京)に持ち込まれた。



## 5. 史料解読から整理した泗州大聖の功能

対象	功能	特別な時期	その他の注記
北宋の国家、官僚にとって	➢泗州：国家安寧、明堂祭祀、禘享祭祀、祈雨、晴乞い、皇家祝聖など機能を持つ神、都市保護神、運河保護神として祀られる ➢他の地域：雨乞い、晴乞い、水害・災害に対する信仰 ➢大藏経を守護する神	特別な時期：北宋末期の徽宗朝宣和年間(1119年～1125年)＝道教崇拝が高まる時期、水神説話が大量に作成された	有力な道士林靈素が仏教禪圧を行っていた。水害退治の際に林靈素が失敗し、泗州大聖が姿をあらわし水害を治めたという説話は、当時の道教と仏教の対立状況を反映しつつ、より強い水神としての性格を泗州大聖に付与し、社会に広めていくことになった。
北宋の一般民衆にとって	➢科挙合格祈願の神 ➢水路の安全を守る神 ➢商業の神 ➢医療の神 ➢仏教の神		北宋時代の辺境地域において、仏教寺院以外の場所で祀られる特別な空間：江西袁州仰山廟、湖南岳陽洞庭湖青草廟、四川普成果玉虚観僧伽堂
南宋の地方士人にとって			泗州大聖に対しては、地方社会に重きを置き、宗族の組織化を進めていった士大夫たちには、地域の安定・一族の利害をめぐる信仰・仏教の発展祈願など、祈念の動機が多様化し、三教融合を促進する動機は伺える

## 結論

宋代、特に北宋では、もともと明堂祭祀、禘享祭祀、雨乞い、晴乞い、都市保護、水害・災害など様々な現実の需要に応じて、伝統的な儒教的儀礼と祈りの対象(巫術、先賢祠、城隍神、山川江河湖海神など)は存在していた。こうした需要に対して、泗州大聖のような仏教の神が新たに登場し、その役割を担うようになった。こうした中で、儒教、道教との競争の一面を見えつつも、融合の面も見えてくる。ただし、先行研究で言われた水神とする一面はまだ見えてこないか考える。

南宋になると、戦争による北方人口の流入、交通路の変化につれて、泗州大聖という神に対して、地方官や地方士人は親族に影響され、自ら信仰するようになったり、統治地域の安定を祈念したりするなど、多様化、地域密着の志向性が見て取れる。道教や民間信仰の神と融合しながら、仏教信仰の形のを維持しながら信仰を広めていく動きも窺うことができる。

異なる史料から見える事実は異なり、異なる人々にとっては信仰の動機も異なり、最も重要なのは、異なる地域において、信仰の展開における差を常に注意して史料を見極めていく。